

## 第4回

## 絵本をみんなで楽しめば いろいろな活動が展開できる



講師 田代 康子 氏

## 1 前回の質問から

(1) 少人数の園では、1対1、1対多数と、意図的に設定を分けて読み聞かせをした方がよいか。

子どもたちの様子を見、絵本の特徴を考え、いろいろやってみてください。1番よい方法は、子どもたちと読み手である保育者とが発見していく読み方です。

(2) 絵本の途中のおしゃべりにはどこまで答えるのか。

「おしゃべり」とはむだな話なのか、絵本の展開に合わせて言っていることかによって違ってきます。基本的に、読んでいる最中に子どもが喋ったことにいちいち答える必要はありません。そう言いたくなる子どもの心の動きを知ろうとすることの方が重要です。読み手が「いちいち答えられないな」と思えばスルーすればいいし、あまり知らん顔ばかりでは可哀そうかなと思ったら、その子の方を向いてにこっと笑うなど、状況次第です。また、読み手に発見をさせてくれるような子どもの貴重な発言には、「えーっ、ほんとはねえ」「どこ?」「どれどれどれ?」と反応します。すると、自分が話したことはたいして重要ではない、と子どもたちは気づき、やがて不必要なおしゃべりはしなくなります。

自分が読んでいる時に子どもが喋ることに対して、嫌だと思っははいけません。大事なのは、何を言っているのか、真剣に子どもの声を聞くことです。「何でそんなことを言うのだろう?」という気持ちで聞くことが、重要です。

(3) 読み聞かせ中の全ての質問に答えるべきか。

答えるか、答えないかが問題ではありません。子どもと読み手が一緒に楽しむことです。「答えるべ

きか」という発想自体、絵本を一緒に楽しんでいないことになります。子どもたちがいろんな質問をしてきたら、一緒に考えることです。「何で?」「何だろうね?」と子どもに返すのです。もしかしたら他の子どもが答えてくれるかもしれません。結論が出なくてもいいのです。大人がやることは、子どもたち自身で考えるためのお手伝いであって、正答を出すことではないのです。

(4) 大型絵本や紙芝居と絵本は違うのか。

大型絵本は見返しが無いなど、作りが丁寧でないものがあります。みんなで見るために拡大コピーしたもの、とを考えてください。紙芝居は「お芝居」であり「演劇」ですから、脚本があります。ト書きがあり、いつでも同じにすることが可能で、子どもの顔が見えません。つまり、ライブではなく、脚本に則ってお芝居するものです。読み手が、子どもを見ながらト書きを決めていくのが絵本です。

(5) 文の長い絵本を読みたいが、2歳児クラスで半数がすぐに飽きてしまい、半数が聞いている。この場合、もう少し短い絵本を読んだ方がよいか。

2歳児は1年間の月齢差が一番大きい時期です。しかし、半数の子が飽きてしまうのは、絵本の長さだけが原因でしょうか。内容が原因かもしれません。1人1人の興味も理由も異なりますから、長さだけでなく、個々の興味や長さに対する対応を見て考えることです。いろんなタイプの絵本を読み、クラスの食いつきのよいものを見つけるのもおもしろいです。ぜひ、ふらふら歩いてしまう子を大切にしてください。その子が止まった時、「なぜ止まったのか」を考えることが大事です。

絵本を知らない子もたくさんいます。そういう子は1対1から、またクラス全体で、難しい絵本ではなく、赤ちゃん絵本をげらげら笑いながら楽しむことです。丁寧に子どもたちを見ながら考えてください。

## 2 読んでいる時、仲間の発言を聞いて、イメージを広げる

絵本の読み聞かせで一番大切なのは、読んでいる時、子どもたちが仲間の発言を聞いて、イメージを広げることです。『もこ もこもこ』（文研出版）を2歳児に読んだ時の子どもの声をお聞かせします。

この子たちの絵本の楽しさは何でしょうか。1つは見立てる発見の楽しさです。桃太郎、ドア、梅干しの種、おっぱいなど、1人が言うと、そこから子どもは次々に発想をしていきます。子どもは他の子どもが言うことをよく聞いています。ページをめくった次を期待するのも楽しかったようです。1人の子どもが言ったのを聞きながらつながっていきます。それがとても尊く思えるので、私は読んでいる最中にやっぱり子どもに喋らせたかったです。子どもたちは、仲間の言葉を聞き、発見するから言いたくなるのです。ですからお喋りというのは、子どもたちが他の子どもの言っていることを聞いている証かもしれません。「クラスがつながる」というのは、仲間の発見があたかも自分の発見のように感じられること、大人でいえば、充実した会議をやった時のような状態をいいます。ですから、クラスみんなで楽しむことを大事にしたいのです。

## 3 いくつもの絵本がつながって広がるオバケの世界

2歳児クラスを担当していた安曇幸子さんの実践です。2歳児はオバケが大好きですが、このクラスは1歳児の時から大好きだったので、『にゅーするするする』（福音館書店）を読んで聞かせました。初めは怖くて黙りこくっていた子どもたちでしたが、自分たちでこの絵本を開き、「こわいね」と言

いながら見ていたのです。中にはこの絵本を抱きかかえて昼寝する子や、常にバックに入れてうろうろしている子もいて、大変人気でした。

そこで安曇さんは、もっと「にゅー」の存在で遊べないかと考え、ある日園庭に出た時、たった一言「にゅーはどこだ？」とつぶやきました。すると途端に、子どもたちは「こわいよう」という子がいる一方、にゅーを探したり、逃げたりやっつけようとして遊び出しました。月齢差が大きく反応が様々な2歳児だったので、安曇さんは「にゅー」のイメージを共有するために、主に高月齢の子どもたちを対象に顔や髪、色などの聞き取りをし、紙に書き込んでいきました。そしてポスターにして壁に貼っておきました。子どもたちは「にゅーごっこ」を繰り返すうちに、ポスターの前で話をし、にゅーの好物や家の場所など様々な情報を加え、「にゅー」の存在を確かなものにしていきました。ポスターは2歳児に限らず、5歳児でも有効な手段です。さらに安曇さんは「にゅー」についてクラス便りでも紹介し、保護者を巻き込んでいきました。

安曇さんは、「オバケ」で保育をつなげていこうと、更に『めつきらもつきらどおんどん』『おぼけがぞろぞろ』（いずれも福音館書店）を読み聞かせました。子どもたちは、これらの絵本に出てくるたくさんのおバケを完璧に識別することができました。すると今度は子どもたち自らが、オバケを発見するようになりました。散歩中に見つけた犬のウンチやマネキンの頭などをオバケに見立て、会話をしたり、名前をつけたりして楽しんでいたのです。その後いろいろな本を読んだり、フェイスペインティングによる「オバケごっこ」をしたりして、保育者が子どもたちをつなぎながら、1年間が「オバケ」の世界で動いていきました。年度末の進級祝い会の劇ごっこは、オバケのお面を作り、1年間の出来事を発表したのです。

どんな絵本を読み、どうつないでいくか意図的に

取り組むことにより、保育者のたった一言で子どもの活動が持続する、そんな保育の流れができていくのです。

#### 4 子どもたちの気持ちを実現しながら広がる世界

4歳児クラス担任の高見亮平さんが、1年間をつなげた実践を紹介します。高見さんの勤め先は原則、持ち上がりさせない保育園でした。4月、子どもたちと一緒に楽しい生活をしようとしていたのですが、子どもが遊ばない、みんなで関わってダイナミックに遊ばないという実態があることに気がつきました。一体何だったら子どもたちがつながることができるかと見ていると、3人の虫好きな男の子がいることに気づきました。日々園庭で虫を探しているこの子たちに、女の子たちは見つけた虫を進呈したり、虫の名前を聞いたりしていました。虫を媒介にするとこの子たちはつながることができるかもしれないと、高見さんは考えました。

池があってそこに虫が来るような生活をさせたい、と考えていた高見さんのもとに、5月『ターくんのちいさないけ』（月刊かがくのとも 福音館書店）が届きました。読み終えた時、虫好きのおさむ君が「池あっていいなあ」と言ったのです。この一言がきっかけとなり、池作りに取り組んだ子どもたちでしたが、決壊の恐れがあるため、やむなく池作りは中止となりました。すると、1人の男の子が衣装箱を使った池(ビオトープ)の作り方を図鑑で見つけました。そこで、今度は衣装箱を使った池作りに挑戦し、完成させたのです。この池に最初に来た虫があめんぼで、絵本と同じだったことに子どもたちは驚喜しました。更にメダカやドジョウを入れました。しかし、それ以後はなかなか虫が来なかったため、子どもたちは来てほしい虫の絵を描くことにしました。それまで1度も絵を描いたことなかった子どもが図鑑を見ながら夢中で何枚も絵を描く、という描画活動になりました。

池によく来るカナブンとハナムグリの数を数えたり、池に来る虫は「お客様」だから、捕まえてはいけない、というルールを作ったりしながら、毎日池の様子を見ることを楽しみにしていました。

虫やカエルが大好きな子どもたちの様子を見て、高見さんは『おたまじゃくしのチャム』（偕成社）を読みました。「チャムが大きくなった時の本を買ってきて」とせがむ子どもの声に対し、「もし売っていなかったら、作る？」という保育者の一言で、その日のうちに続き話ができ、紙芝居にすることにしました。絵を描くことが嫌いな子もいたので、高見さんはコラージュにし、誰でも作ることができるようにしました。その後、保護者が紙芝居を絵本にし、卒園時に配ったとのことでした。

子どもの発想を活動へと展開させると、こんなにもおもしろい活動ができるのです。「やりたい」という子どもの声を聞きながら、保育計画の中に位置づけていくのは、保育者の仕事です。

#### 5 遠足を「ただの遠足にしないために」仕組んで広がる世界

仕組む、仕掛けるということをし過ぎてはいけません、保育者の波長と合うと非常に面白くなります。5歳児クラス岩附啓子さんの実践です。詳細は『エルマーになった子どもたち』（ひとなる書房）として復刊されています。

5歳児の遠足を「ぼうけん遠足」にしようと考えた岩附さんは、出かける2日前から意識的に『エルマーのぼうけん』を読みました。そして絵本の最後に、「その後のエルマーとりゅうの行方は、誰も知りません。どこへ行ったのでしょうか。ひよっとすると、みんなのそばに隠れているかもしれませんね」と付け加えました。その途端、子どもたちはざわつき、りゅうの行方を知りたくまりました。しめた、と思った岩附さんは更に「昔、おじいさんが片田の山でりゅうのしっぽをちらっと見かけたという話を聞いたことがある」と加えると、明日の片田の貯

水池遠足はりゅう探検に変わりました。りゅう探検ですから、準備をしなくてはなりません。ヘビ、サル、イノシシそれぞれに対策を考え、持ち物を決め、山道は1列で進むことを約束するなど、子どもたちに緊張感をもたせました。さらに、この探検に行くことは、親にも内緒にしておくよう念を押すなど、岩附さんは探検気分を盛り上げます。

遠足当日、楽しく遊び帰る頃になって「あっ、りゅうのしっぽが見えた！」と岩附さんは叫びました。すると、「りゅうが見れてよかったなあ」「りゅうを見た」と、帰りのバスの中で子どもたちが言い出したのです。本当は見えていないのに、その気になったのでした。

翌日からエルマーごっこが始まりました。岩附さんの実践がすごいのは、常に子どもの思考に働きかけていくところです。「みかん島やどうぶつ島はどこにあると思う？」という岩附さんの問いかけに、世界地図をもって来た子もいました。遠足の紙芝居を作る途中で、子どもたちはいろんなことを考え、次々に疑問も出てきました。「エルマーのりゅうは、恐竜なの？」「何億年も前のりゅうが、なんで今も生きているの？」「他のりゅうはなぜスカンクキャベツを食べなかったのだろう？」「スカンクキャベツってどんなキャベツだろう。見てみたいなあ」子どもたちは次々に考え、さらに保育者が問いかけます。岩附さんの真剣な問いかけに、子どもたちもまた脳みそフル回転で考えたのでした。

## 6 絵本を共通のイメージの基点として、「クラスの文化」「園の文化」を創る

大事なことは、子どもの考えていることを知ることです。子どもたちは心を動かし、脳みそフル回転でかなり考えています。それを聞き出すのです。クラスの文化の芽はいろんなところにあります。日常生活の中で子どもの言葉に絵本の話が出てきます。それをキャッチするのです。生活を共にする保

育者だから、キャッチできるのです。

疑問として投げかける保育者の一言は、子どもたちのイメージを広げるためです。子どもたちのイメージを敏感に察知して、ちょっと刺激します。だから、スカの時は深追いせず、すぐに撤退です。これが仕掛けたり、楽しく遊んだり、活動を広げたりするコツです。

クラスの文化にするためには、①同じ絵本を繰り返し読むこと ②時と場所を選ばず、突然絵本を思い出した子どもに、保育者がふさわしい反応をするために、真剣に絵本を読むこと ③ポスターにする、繰り返し話をする、「おもしろかったね」と言う、など絵本にまつわる話題をみんなが知る工夫をすることです。

絵本をクラスのみんで読む時は、自分と同じ心の動きをする仲間を発見できます。絵本作家は、だいたい同じ年齢だったら、同じように心が動くように作っています。だから、「そう感じるのは自分だけじゃない」といった自己肯定感を子ども自身が体で感じるができるのです。これは、自信の無い子には尊いことです。

また、仲間の言葉を聴けるときでもあります。同じ思いだから、耳を澄ますのです。

## 7 終わりに

最後に、子どもたちの心の動きをキャッチするために、①読み聞かせ中の「息づかい」を感じてください。ページをめくるタイミングも、間もこれで決まります。②読み聞かせ中の「おしゃべり」を大切にしてください。また、読んだ後の会話にも子どもたちのイメージが満載ですから、読んだ後の会話もうんと楽しんでください。

読んでいる時の楽しみも、その後広がる世界の楽しみも、保育者が基点になります。保育者の一言、保育者の感性が基点になります。絵本で仲間をつなぐ、絵本から広がる活動を創ってください。